ミオヤの光

第四巻 第一號

本欄御遺文

1 大ミオヤ
2 衣
3 汚れたる衣
4 淨き衣
5 解脱衣
6 應法妙服
7 懺悔の衣を被よ
8 悪魔
9 自己に依頼せよ
10 全力を傾注せよ
11 習慣の力
12 怠惰因盾なる勿れ
13 人格の因と縁
14 煩悶する勿れ
15 義務と愛
16 簡易主義

末欄

1 こぼるゝ光　好月
2 御あと　夏山
3 思ひ出
4 所感　吉岡性空
5 御三回忌　御三回忌　観道　仙界

大御親

大御親は正しく存在する哉と心の闇き子は疑ふならん。宇宙は全體通じて佛教にて法身毘盧舎那如來と云ふ。これを大御親と名く。宇宙は地水火風空の物質と識大の心質と、物心二質も其の實は無碍の一體にて吾人は此の分を受けて身體と精神とに現はれて人をなす。宇宙が一體の大御親なる故に天地萬物も一切衆生も皆其子なり。宇宙全體の大御親に比較したならば數とも知れぬ地球の其亦地球の寄生物の如き人類さへ精神發達して大御親が秘せる地球自然界の事理を悟て種々の發明をなすに非ずや。況んや其の大本源なる大御親に於ける甚深不可思議の狀態は人間の智識などにて測り得べきものにあらず。

人はいざ吾人は大宇宙には實に絶對的不可思議の大靈の存在を仰がざるを得ず。實に法身は無量壽にしてまた無限の大光明者と信せざるを得ず。また宇宙は是法身無量光にして其の不可思議なる吾人が肉眼に現ぜる自然界も日月星辰繫りて此宇宙は實に

無限にして邊際も分界もなきものなるを信ず。肉眼に對する自然界既に廣大無邊なり況んや心眼の對象なる神靈界の微妙不可思議甚深の理に於ては如何とも稱すべからず教祖が華嚴等に言を極め義を盡して說れし其佛境界の甚玄不可思議なる消息は吾人の如き淺劣の徒と雖も心靈的實驗に於て靈界の妙は實に言語の及ばざる處なるを識る。況んや大聖人の神眼に經驗し給ふ處の宇宙心靈界の消息に於てをや。華嚴經の說の如き何ぞ夫れ荒誕無稽の說と云ふべけんや。吾人は此地球上の寄生物なる肉の身を以て見ては微妙ならざれども內面に有せる靈性は是れ大法身無量光の分子として佛性の存在あり。之を開けば六合に亘り大宇宙と合一する性を有せり、以て佛說の眞理なるを信じ而して其の靈界に逍遙するを以て人生最上の慰安とす。世の文運開け此の身に於てさへ地球上を數ケ月にて一週するを得るにあらずや。富者は恣に世界を遊覽するにあらずや。吾人苟くも靈界に心を用るもの心靈を欲しきがまゝに十方の淸淨國土に逍遙せしめ無數の大聖人と手を携へて樂を願ふことなきことを得んや、是大御親の賜として感謝せざるを得ぬ以所である。

大御親は絶對無限無始無終永恒本然にして精神とも物質とも分つべき能はず。宇宙大心靈即ち法身無限光と名く。宇宙は一大靈態であるから人間に比して智惠と意志の如きなかるべからず。之は一切所に滿てる大心靈の智と意志なればこれを一切智とも一切能とも名くべし。一切智と云ふも人類の智の如き分別思慮の智とは云へない。人間から云へば自然界中に存在して實に完全なる理性の如くに認めらるゝを智と名けたるのみ、即ち天地萬物の中に整然たる條理あり。秩序あるは事實なり。天則に行はるゝ萬物中に一切智の理性存すと云ふも不可ならざるべし。また萬物の生活し運動する勢力あるは大宇宙內的の意力の存在と云ふも然らん。

此の法身本有の無限光は絶對なれども親子の區別と關係とを說明せんには宇宙間の本源と萬物とありて先ず三性に分ちて親子の因緣を示さん。三性とは如來性世界性衆生性なり。

如來性とは又神性とも云ふべし。即ち宇宙の本體一大心靈態法身毘盧舎那絶對無限にして萬物何れの物も對比すべきにあらず。また法身如來は因緣に規定せらるゝもの

にあらず相對に約束せらるゝものは成ずればまた壞し生ずればまた死し生滅變化極りなし、絶對は本然永恒の存在にして他に規定せられず本然自爾の體なれば生滅變化なし。之を如來性と云ひ一切萬法の所依とする處なり。これを圓成實性とも云ふ。圓は圓滿絶對無限の義成は本然自成にして因果的に成ずるものにあらず。實は眞實本有の靈性なれば即ち圓成實性と名く。是即ち萬物の大御親にして吾人はこれを法身無量壽如來と號す。

世界性とは十方三世の形式因緣因果的に成ずる處の性にして因緣和合性とも云ふ。世界一切萬物は因緣の相互の約束によりて成りまた種子より萠發し實を結びて又秤となる如く因には果あり果には又因あり。是の如く萬物此關係によりて行はるゝを世界因緣性と云ふ。

如來性は絶對無約束、世界性は相對相互の因緣の約束によりて成る。そこで其の關係は世界因緣性の萬物も其の所依の根據がなくてはならぬ其の根據は何を以て爲すとならば卽ち如來藏性であり絶對實性である。

宇宙の大靈が自己絶對なるものいかにして因緣性の世界性現はれたのであるか。大靈自體は絶對なれども大靈に常恒不斷の活動力あり。卽ち一切智能の働きによりて現はれたる一面が相對の因緣の世界性なり。大靈自己は絶對なれども現象は相對なり。大靈自己中の相對現象が世界なり。

絶對と相對の世界とは一體の本體と現象なり。絶對の一切智一切能世界萬物中に內存して內面より云へば一切智にして智の秩序はこれを外より見れば因果的に出產せられ一切能の偏動力は世界の生產活動の動力となりて現はる。世界萬物は無明の盲動的に生產するものにあらずして整然たる秩序即ち內外面の因果律ありて動じ有機物となる。

次に衆生性とは世界性因緣因果の關係により產出されたる一切の有機物に通じても種々無量雜多の種類に分れたれども同じく因緣因果の律によりて生成せるものなり佛敎に因果無人とも云ふ。蓋し人類なるものも因緣和合の上に成立したるものにしてその因緣和合を離れて見れば本の元素のみにては人間にあらずと云ふこと一切有機物

に通じて同理なり。元素の種々の因緣和合の上に動植物も成立す。故に一切衆生は因緣所生法なり然らば人間も因緣因果の法より造れしものなり。因緣の關係は實に複雜なり。因緣關係は種々に形相を變化しまた因果の關聯にて遺傳す之を衆生性と爲す。然らば人類の如きも因緣律を離れては生成せず。故に世界の產物因緣の所生なり。又世界性因果は理法の親なり。然るに其の因緣なるものも本絶對大切を體とするが故に衆生の本源には絶對の大靈を父とす。又根底の靈性より云へば大靈の分れなるも現在より云へば世界因緣所生の子なり。故に大靈の孫なり。靈性は大靈の分れなれば子としての資格を失はず。

衆生は大靈に稟けたる靈性は伏能として存じ世界性所產の肉體の分は先に發達しまた大靈の分れとし大靈の智と能の分れなる衆生の精神發達の順序は意志の運動生理的に動く方が先に發達し智の分なる精神の智力等は後に發達す。

一切衆生は本來如來性を本として世界因緣因果の複雜極りなき雜多の性を受けて人性をなすも靈性は伏能として形體の方面先に發達す。

大靈大御親は絶對なれば本一體なれども其の常恒徧動のはたらきに於て一方には一切智と一切能のはたらきによりて產出する方面の世界にして卽ち萬物因緣因果の關係に成立す。其の因緣の所生なる衆生性は因緣自然の律によりて初めに極小より漸次進化して衆生性を圓滿に發達せしむ。次は地上の生物界一體に通じても原始の極小なる生物より因緣の關係上次第に進化して遂に人類となるに至る。又個體としても然り人類にても初胎兒が精虫の極小より發はれて圓滿なる人體となるに至る。

大御親は斯の如く一方に向つて一切智能に依つて世界に生產したる衆生界を極小より進化せし如く圓滿なる人格とす若し生物を產出し進化せしむるは終局目的ありとせばいかにして大御親は圓滿なる自性中に衆生を攝取し給ふか。

大御親は右の手より相待の世界に向つて蒔たる衆生を漸次に向上せしめて終に左の手を以て高等なる靈界に攝取し給ふ如くに觀せらる。高等なる宗敎の示す所は如來の絶對なる常恒不變の靈界に歸趣するを目的とすればなり。佛敎の敎ゆる所は衆生の靈

直接に衆生を摂取するのではない

性を開發し煩惱を解脱し圓滿なる靈體に體達するを期す。

終局目的に攝取せらるゝ法則。

大御親は直接に衆生を產出せしに非して世界性を發展し世界性の因緣の法を以て衆生を生せし如くに絕對の大靈は直接に衆生を攝取同化するにあらずして因果律理法を以て衆生成佛の階梯を立てしむ。因緣に約束せられし衆生は因果的に約束を解くにあらざれば理に協はずとし大御親は因果の法に順つて世界に出現して衆生救度の道を示す。報身佛即ち是なり。

能攝の報應佛と所化の衆生界とは同じく因果の法によりて顯るゝも其の性質に於ては相同じからず。衆生は一切能と云ふ意力の方により一切智は有れども所生の衆生には意志の方が先に發達し即ち人生の眞理を悟り能はぬ生理の方のみが發達して居る衆生がある。如來の右の手より蒔出されたる子である。

報應二佛は左の方より一切慧の光明方面より因果法を示して衆生を攝取して靈界に歸らしむる爲に顯れたり。衆生を離れたる大御親は本絕對的一體なれども左右の働きを分けて三身の說を以て大御親の働きを說明せば。一、法身。二、報身。三、應身。

絕對獨尊の大御親が方面を分て顯れたる身とす。

法身大御親は自然界に向ひ因緣性の世界に向つて萬物を開展し生產するは天則秩序を以て萬物を律するの身なれば法身と云ふ。法身としては天地萬物の理法を爲さしめて衆生の身心四支五官よりすべての生理の法を具へてまた萬物に法則ありて行はれしめ因緣の世界には終局の目的に靈界に攝取する理法あるが如くに法身は衆生界を進ましむ。また生物は進化の終局は靈的生活に入て靈界に歸ることを得らる伏能具備せしむる如くに觀せらる。天地萬物の備を以て衆生を極樂に向はせしむるは法身の性なり。

次に報應二身は衆生を終局に攝取せんとの御親の慈悲と靈力の現はれたるを信ず。報身としては因に法藏の大願を示し果に十劫正覺の報を現し因果の世界に顯れし如來なり。また衆生が如來に歸命信賴すれば其の心に報ひて顯れまた攝取同化の德を施す

報佛は天に在りて衆生に儼臨し太陽の照すが如く。應身は地上に出でゝ報佛の光明を仰がしむ。一方は天の淨界に在りて衆生を照し應佛は地上にありて衆生に敎へて如來に歸せしむ。之を釋迦此方發遣と云ひまた彌陀即彼國來迎と云ふ。彼は天佛として衆生に照臨し此は人佛として懇ろに敎へて歸せしむ。斯く二身に分れたれども同一の大御親なり。

衣

如來の賜なる靈の衣は靈格を莊嚴し靈生活に必要缺くべからざるものなり。

人の生活に身に纏ふべき衣服がなくては應はぬ如く宗敎の心靈にも是と比較すべき其の心靈の生活を助くべき衣服なくてはならぬ。或は解脫衣又は福田衣又は應法妙服或は慚愧衣又は柔和忍辱の衣等の法を以て心靈を覆ひ莊嚴すべきを表はしたる衣の名詞多し。

佛徒の袈裟を身に着くるは、彼の裸體外道の如きはいかに見苦しき姿は慚愧すべきであり。是は一體心に慚づる事なき故に姿もその表である。佛徒は應法に應はぬことは慚づべきである如くに身も應法の衣を着る、之を慚愧衣と名づくるのである。吾人が四大の假和合なる此の身體を身分にも應せぬ位飾りて還つて己が心の卑俗なるをも表はして慚ぢぬものもある又は綾羅を身に纏ひ珠玉腐を飾りたるも心靈には靈格を莊嚴すべき應法の衣を求めず。其の精神の上には人格莊嚴の備りなくて實に其內面生活なる精神には法の身に纏へるなくして憐むべきものあり。身の虛飾の爲には金錢を塵埃の如くに投ずれども慈悲同情の爲には一掬の涙もなく慈情より洩出する一厘半錢も吝む者あり。

自ら廉恥の心なくまた自己の分限を知らざる如きは自己の人格を莊る衣なきものなり。

然るに吾人自ら視れば從來の精神の生活の狀態はいかんぞ。己が美服を誇り他人の勝れたるをば羨み嫉み、否服裝のみではない一切の人格を莊嚴する道德情操なく、自ら人を畏伏する威嚴と暖かなる慈悲の力を以て人を覆ふと云ふやうな事とて言にこそ

言ふべけれ、精神的にとても〳〵完備して居らず。能く自己を反照して見れば己ながらもあきれる計りなる我であるけれども己が非なること汚なることが自覺できぬ。己が心の染穢とは決して思はぬから懶らいはせぬ。

今にして思へば何故に我は自己の染汚をさまで苦にもせぬのでありしか。己は罪の深きもの己は汚れた者なるぞ。

汚れたる衣

世に未だ宗教心なく自己返照の光なく只肉の慾を求め肉の奴隷名利の從僕となりて利己主義の漢は己が意は貪嗔邪僞奸詐百端實に忌むべき思想のみが其胸裡に往來し穢はしき情と意なれども、自ら口を開けば他を謗り自ら誇り我は罪を造りし覺えなしと言ふ、されば慚愧の要なければ懺改むべき程もないと謂ふ人あるは何故ぞ。彼は穢はしさにみたされながら自ら自己の汚を知らざるは外でない。喩へば泥よりも尙穢なき衣を着る人はたとへ泥の衣を着るとも敢て穢なきを感せず、其は自己の衣の穢きが故に外より受けたる穢さを感せざる如くに、生得我痴我慢ばかり蔓延り、其の性情に穢さが其の本體となつて、其の汚が我が主人と爲つて、内にまだ靈性は伏して少しも發萌せず。外に靈の光に接觸したる事なき故に身と口と意とに於て善からぬ業を爲せども自ら其の非なるを自覺せず、穢なきを感せざるのである。其の人は内心は穢を以て我と爲してそれに思想と言語とに於て己を穢すをも穢れてあるを覺えざるのである。外は教の光明に照され内は靈性が發育して良心の顯動してこそ初めて己が三業の所作が己を汚すことを識り、情に於ては非を悔ひいかにして我は淸きに己を滌がんものよと思ふのである。思想の高き人より照しみれば忌はしき身にありながら自ら汚れることを識らざる人は穢の衣を自ら諒として己を汚すの言語行爲を苦にせぬのである。私共は生得穢の衣を我に着て泥よりも穢なき衣なれば泥つきたるを苦にせざりしが己を淸めて已に靈の淸き衣を心に着くることを得たるは何に幸ぞ。

淨められたる我は淨き衣

我は生れながら汚れたりき。自ら汚れを識らざりき。されば忌はしく感せざりき。また心に淸き衣なきを恥ぢざりき。

彌陀心水沐身頂、御音勢至與衣被、我は彌陀の心水に頂を沐られて初めて曾つて生れながら衣たる心の衣の汚さまた日々に汚し來りし心の衣のいかに穢らはしきを忌み厭うて如來の心水に滌がれて無始の汚れの忽ちに淸き我となされ觀音勢至に衣を與へて被せしめられる己となりしことを悅ぶ。靈水に沐した靈我のいかに皎潔なるぞ。ミオヤは此靈に應せる衣を以て我に與へ給へり。我は淨衣を被りてぞ感ず。靈に被る衣は淸淨無垢なり純潔なり一點の汚なきなり。

昔泥より穢き衣には殊更に汚れは感せざりき。今は純潔無垢の光の衣を着る。己が肉の爲に之を汚すことの實に忌はしきを深く感ず。純白無垢の衣を被る人は之を汚すことを憂ふ。若し之を汚すことあらば忽ちに滌がんことをおもふ。我等は如來より聖衣を以て靈に被むれり。願くは世の五塵六欲の爲に垢つかざらんことを欣ふ。然れども靈我の舊主肉の我は舊習性によつて動もすれば昔の穢き衣の中に身を包まれんと欣ふ。

五塵即ち綾羅の美服。蛾眉の粉黛の好きは己が靈格を汚すの色とも覺らず、婬聲に想を恥るは淸き衣を染す塵とは感せざりき。アルコール中毒の己を毒する物を避て口腹にまたなき耽嗜味の物と覺ゆ。傷しきに觸るればまた衣を傷くることを自覺せざりき。弱き我らかくばかりに淨衣着あるを覺らず。靈の衣染むを覺へず。また眞實に之を滌ぎ淨めて玉はらんことを欲求せざるは自己ながらも無慚なるを知る。

垢染の衣は衞生に害あり。

吾人が眼に色を視耳に聲を聽き舌に味ひ身に觸れたること等の如き、すべて外の刺激心意に感ずれば、それが尙後にも屢々内心に往復して心に纏ふものは卽ち心の衣である。然るに我ら法王の子として恥しからぬ心光の衣を着つゝある己なるを顧みて自己を返照して現に今我が靈に纏ふものは何ぞと、自ら顧みて疾しからぬ純潔無垢の精神を以て快活に光明中の活動内に在り。外に出で如來と共に在る身の、心に纏綿するもの何ぞと反省して、我が法王の子たりとの内心鼓舞の己れこそ純潔無垢の衣を

着たる己なれ。

淺ましき凡夫の憐れさは視し色聽きし聲に纏はれて心に被る衣物の益々汚穢の深くなるを覺らず。是心靈生活の衛生に害の甚だしきを感ぜざるは情ない。昔ウバキッタ尊者に弟子あり。自ら學識と智解を怙みて深く悟達の奥に進まず。常に言ふ、我が學解已に達せり師なんぞ我に祖位を禪らざると。或る時師に隨行して路に就く途中に一の妙齡の女子皓白の臍を露はして洗濯するあり。弟子僧、その白き臍を凝視しに暖血沸き情動きたりき。頓て尊者其の僧に告げて曰く、汝が白き臍に動かす情其の心情の如きそれでも祖位の資格あり哉と。其の僧大に慚ぢて答ること能はざりしと。

凡夫の心に常に纏ふものは六塵の影を追ふて去らず。全く己に實力なくも名譽の望求は纏綿として滌ぎがたく或は實術婆迦が面に刻める王女の玉顔は洗はんとするも滌ぎ難く遂に彼は戀の火に燒かれて死せりと。

凡夫の心情に纏り易く脱し難きは闇路に迷ふ戀衣。是が爲に有爲なる青年を墮落の淵に沈ましむるは是より甚だしきは無し。また耽酒嗜味の凡夫心に薫染して此に深く染み著きたる後には中々に其の習性はとても脱ぎ難きものである。色情と耽酒とは最も凡夫の心に染みて甚しき染汚となるものである。靈的生活の純潔無垢の心衣を以て靈的生活の爲に害となるものは概して五塵六欲の纏ふ處に甚しいのである。深き靈的生活を望むものは斯の如き惡習に染まざるを要す。是垢汚たる衣の衛生に害あると同じく惡習に汚染するは靈的生活の害となる。

解脱衣

佛徒が衣を被る時に大哉解脱服、無相福田衣、被者加戒行、廣度諸衆生との偈文を唱ふ。此の解脱服は實に精神に着て是が表記として身に纏ふ衣にまで及ぼすものである。

我は大御親の光より此の解脱の衣を心靈に着せて戴くのである。解脱の衣とは何である。解は解く脱は脱ぐ。我ら凡夫が天性稟賦として生得の煩惱、共通的の煩惱とまた人々特殊的に持て生れた人々の氣質とそれから生後に染み込んだ惡習慣とが我

に染みこみ、我が心の衣として纏ふて居る。強く纏ふて中々解げぬ。此の惡性惡癖の纏ふ着物は脱ぎがたい。是を解き脱ぎて清潔無垢の無相福田衣にして戴くのである。

煩惱にも貪欲瞋恚愚痴を始めとして嫉妬憍慢恨害等の種々の弱點が凡夫の心には生れながら纏ふて離れず。

煩惱にも人に依りて厚薄はあれども心に煩惱の服を身に纏ふて居らぬ人はない。氣質にも或は體質のいかんによりまたは遺傳にもよる。剛情なるあり苦勞性あり無貪著なるあり執著强きあり何れも生れつきの氣質といふ衣は脱ぎ難いものである。そは靈性本心の上に汚す氣質の服であるからこゝにほどきて脱けば脱げないことはないのである。

生れて後に其の周圍の非情に染みついた惡習も中々脱けがたいがそれらを身に纏ふて居てはとても法王の子といふべき靈格の生活はできぬ。

法華經の長者窮子の喩の如くに、吾人靈性の本源は如來より出づるも、淺ましき動物の染汚たる習慣が性となりて生れし身の悲しさ、いかに長者の子にして一度迷子と成り乞食の群に入りて久しく生活すれば、矢張り乞食の子である。垢衣を身に纏ひ羸劣穢臭目もあてられぬ汚れである。けれども此の乞子が長者の許に歸りて垢汗を滌ぎて長者の子相當の服を身に纏はしむるには先づ汚れたる衣を解き脱がせねばならぬ。

我等も汚れたる我に纏へる心の衣の煩惱や氣質では法王の子たる靈の生活に入ることは出來ぬ。いかにして解脱を得られやう。自己の力では解けぬ脱げぬ。

佛とは誰が結びたる白糸のくりかへしみよ賤のおだまき。吾々の性情に結びつきたる煩惱の衣は何の紐を以て何に結びつけてあるかは自らわからぬ。けれども煩惱の己に纏ふて居ることは確かである。慾も瞋も嫉忌も恨戾も持つて居る。また己が持ち前の氣質も種々の色合の模樣の着物をきて居る。其の氣質として見苦しい程虚榮心の衣の氣質もあれば恐しい荆のような觸るも危險なる氣風の服を纏ふてあるもの等實に千差萬別の氣風の服を人は纏ふて居る。人々各々自負自誇して居るものゝ實には眞に人格を莊嚴する服ではなくて實は靈を覆ふ處の染汚物である。人は是らの染れ汚れを脱ぎて靈の服を以て靈格を莊嚴すべきである。

其の煩惱も生れつきの氣質の脱ぎ難きことは能く人が言ふではないか。どうも私は是が生れつきの性分で據ないと。また是が凡夫の持ち前でとても脱ぎがたいと。成程其の解き難い脱ぎ難いのは尤である。けれども全くそれは良くないと云ふことも自ら信じて居るであらう。此の氣質此の持ち前が惡いと自覺したならば自分の力で脱ぐ事が能はぬとも是を脱いで垢のない純潔無垢の衣を心に着た方が愉快であらう。此の爲にこそ解脱の要と能とがある。

大御親は私共の生れつき一旦聖旨に背きて汚の衣に心を染めて靈格を失ひ靈の生活が能はぬを憐み、子を愛しむ親心、私共の爲に見るも忌はしき汚の衣を脱ぎて清き衣を心に着せしむるが恩寵の本願ではないか。

若し私共の天性汚の衣が無きもの本來純潔無垢な物ならば解脱の要はない。大**ミオヤ**の智悲の光も要らぬもの。佛道何い爲ぞ。之は本來私共の心は是非とも解脱させねばならぬ必要よりこそ**ミオヤ**の本願の光明もあるなれ解脱の法も要るなれ。

又是と共に私共には本々純潔無垢の衣を與へて聖き靈となり。靈の着物で生活できる性あればこそ、**ミオヤ**の本願も能ありて尊く辱けないのである。

いかにして脱ぐことができやう。

植物の栗でさへ果が圓熟すればトゲの毛衣を脱ぎすてゝ人に珍重せらるゝ果實となる。吾人も如來の光明に依て靈が圓熟すれば煩惱惡質の衣から脱れて靈の清き衣を被て清き生活の人となる。

日光に乾されたる澁柿果は珍重せらるゝ甘味と化す。吾人如來の心光に浴するときこそ煩惱と氣質と惡習の着物を解脱して清き衣を被て清潔なる生活をなすに至る。それが解脱の衣である。

解脱衣をきれば自由となる。氣質の爲に纏はれず。煩惱の爲にも絆されず、自由の天地にすみて靈の生活を得る。

人に嫌はるる毛虫も時來れば毛衣を脱ぎ捨てゝ綾羅綿繻も及ばざる羽衣と變つて神通自在の蝶となり衆人の爲に珍重せらる。

我等も如來の光明によりて煩惱の毛衣を脱け出でゝ自由意志の人と成りて此の世から聖衆の數に入るべきである。

應法妙服自然在身

本願の文に、佛の所讃の如く應法の妙服自然に身に在らむ。若し裁縫擣染洗濯することあらば正覺を取らじと。

ミオヤは我等に應法の妙服を身に着けしむと。現世に於て吾人は此の應法の服を着て靈の生活をさせて下さるのである。現に吾人は着て居るのである。裁縫洗濯もなくして靈に與へられし衣である。

應法妙服とは眞理に應ふ衣である。古人も言るあり若し先王の法服に非ざれば敢て服せずと。外形に於て已に然り。況んや其の本源なる心靈に於て**ミオヤ**の光明に生活せる者應法の妙服を裁ずして清き生活が出きやうか。我等は心が常に如來と共に在り行往坐臥に於て離れぬのである。其の心に於て如來の與ふる光明の衣を放ちて裸體で居られうか。一度靈に被られたる靈の衣は脱ぐことはできぬ。脱いで脱がるゝものは煩惱や氣質の肉に就いての迷ひの衣である。眞理の光を以て心に得たる上は之を脱ぐことは能きぬ。是が禪に所謂自性天眞の解脱衣である。裁縫も洗濯も要らぬ眞理の衣である。

けれども此の無垢清淨の心を本として其れが衣の地である。またその上に種々の模様恰好がある。應法ならなくてはならぬ。吾人が世に處するに常識なくてはならぬ。應法は法に應ふ心を衣として世の人々に對すべきである。

常識を缺きて偏屈邪癖なる心を以て他人の迷惑をも顧ぬ如きは心に應法の服をかけぬからである。

應法は眞理に應ふ常識を以て身を莊嚴することまた道德を以て己を具ふることである。

己が分限を辨じ恭儉にして己を守り、正義廉潔正直至誠は衣の地を堅完ならしむる物、慈愛同情公平無私の同事利行愛語布施の如きは色合模樣の最とも美なる物である。

應法は先王の法服に非れば敢て服せずの義にて常識乏しき時には世に處し公衆に待

するの應法が明でない。常識は矢張應法の智識にて百般の事に渡りて宜しき應しき程度を誤らず分を超へず。

そこで吾人ミオヤの光明を被つゝ在る生活には己を持し他に待するの心意、法王子としてあるべきように在り爲すべきように爲したりせん。突飛な行爲偏頗なる意向は應法の服を着たる心にあらず。宗教家とし教育家政治家とし農家とし各々其の分に應じ天職を完うし。己が心に具備すべきを具へ整ふべきを整へ、たとへ形骸の服裝嚴具に於て缺乏することあるも、精神に人格を全ふする被服裝嚴は完全なるを要す。而して始めて應法服をきたるものとす。

從來の佛教信者の中には偏癖固陋なるありて、私共此の世で學ぶべきことを學ばずとも識るべきことを識らぬとも、死して極樂に往けば自然に一切智を得らる。今は苦んで習ふに及ばずなどと謂ふものもある。成程學ばずともよき事もあらう。然れども學んで己を完からしむる事までも學ばざるが還てよき物のように意得たる頑迷なるものあらば凭る族は應法不應法は議するに足らずである。

活用の出來ぬ學問又驕慢心を助くる智識の如きは寧ろ避くるに如かず。なれども如來の光明に生活する身の處世に適當したる常識を缺きては應法の服を着たる生活は不可能である。

なれども全く至誠心に直質丹心の信仰より如來の光明を得たる精神生活には自から完全に常識を具へたる人と同じく常識に應ふ處世ができる。

如來の心光を被りたる人は己を持し他に對し應法ならむことを期せんには常に深く思ひ熟々計りて心自ら端正にして辱精に道を行ひ世事を決斷せよと云ふ。

孔子が一以て之を貫く忠恕之のみと。

如來の心光と云ふも忠に恕る處に良心の聲として啓示さるゝが即ち光の衣被たる人の生活または行爲と現るゝなり。

懺悔の衣を被よ

光明に浴したる身、光明を被むる身は常に純潔無垢の衣を以て心靈に着ける自己清淨無垢にして始めて外の穢垢を認識することができる。そは如來の清き衣着たればなり。清き衣を覆ふ身にして思想にも行爲にも汚點の起るあらば自ら省みて良心は忽ちに血潮となりて自ら慚愧に耐へずして苦悶おくこと能はざるに至る。

己れ穢すまじき靈を穢し爲すまじきをなし言ふまじきを言ひ弱き己を呵責し躓きたる我を悔ひ更に再びなさんことを希望するは慚愧の衣被ざればなり。若し心に慚愧の衣着ざらんか、己が非を飾り惡を裝ひ遂に靈をして自ら墮落の泥に溺れしむるのである。

如來の光明に遇ふて始めて慚愧を感ず。若し意にして闇黑にをらんか己が非惡も認むる能はず。然らばいかにして慚愧の情や發らん。退教經に慚は鐵鉤の如く能く人の非法を制す。また慚愧の服は諸の莊嚴に於て最も第一たりと。

實に慚愧の服を着たる人は美點である。世に無慚無愧の鐵面皮程見苦しき者はない現代の如き人心浮薄に只虛飾に流れ己が分を顧ず。天に慚ぢず。人に愧ぢず。其の精神生活に於ては上に在つて政治を執る者己恣にして人民の意を察せず。經に曾卑上下貧富貴賤勤苦忽務して各殺毒を懷く。惡氣窈冥にして妄りに事を興さんとて天地に違逆し人心に從はず。內心に毒を懷き表面を裝ふて世を瞞着す。皆々然り。是の如きは他人が然りと云ふに非ず、己も亦此の張本人である。然れども其の非なるを自覺するの明もないのである。斯く闇黑の世なればとて爰に始めて大ミオヤの光明なくてはならぬのである。靈光に照されて初めて自己の汚れたる衣の慚愧に耐へざるを感ずるのである。

光明の生活なる己れなりと自覺しても中々に脫ぐこと難きは業識生得に心に着て居る煩惱の衣である。氣質の肌着である。人と生れ物心覺えて後に見るに聞くにつけて世の塵埃に益々染みていかに汚れたるかもしらず。光明に遇ふて全く己が汚れたるを覺ゆる實に恥しいのである。

彼親鸞上人は我に戒なし。無戒の僧只慚愧を以て戒となすと言はれた。上人は流石は光明中の人である。靈光は自己の內的生活の內容を照破する時はいかに聖人と云ふも如來の前に慚愧だけは感ぜざるはなからん。西人も云へり。實に我は無益の奴世

に除くに如じと。己を見るこゝに至つて賢人と云ふべきである。何人が肉ありて眞の清淨無垢なる精神あらん。然れども光明に照されて己が眞實清淨に非るを自覺するを以て、清淨なる如來の光明を仰ぐ、若し如來の光明を以て衣とせざればいかに如來の中に生活することが出來よう。光に遇ふ者にして眞の慚愧衣を着る。慚愧の衣はミオヤの賜である。之を着ればこそミオヤと共に行住坐臥を共にすることが出來る。

破れたる袍を着て恥ざる子路は精神に衆人に對して內心疚しからざる勇氣を以て衣とすればなり。

我等現代は世間概して華奢に流れて內面の腐敗甚し。光明を得たる人にして此弊風を矯正するにあらずんば吾が同胞をして餓鬼道に墮さしむるの已むなきに至らん願くは吾同胞よミオヤの光明の中に慚愧の服を着けて生活せん。

惡魔

惡魔は人の弱點なる虛榮心高慢心を利用して其の胸中に潛みて、其の人の精神の內德を失はせん爲に、成るべく外にのみ眼も耳も向かはしめて。他人の華美なる服を見れば忽ちに我も欲しいと云ふ心を惹起させ、而して少しも自分の分を顧みることは思はせぬ樣にす。若し全く己に資力ある者省ることあらば返つて己を修め完き資力を養はんとす。それでは惡魔の目算がちがふ。故に人々胸のうちに潛みて己を省る方の心を覆ひ張りて只名譽虛榮に全力を注がしむ。惡魔に魅せられる鈍物は有頂天となり家をも顧みず家族をも慮ばからず。只名譽と虛榮の惡魔の唆す處に隨て盲進す憐むべし。彼は竟に惡魔の屠となりてしまつた。（以下斷篇）

自己に依賴せよ

獨立自營の精神旺盛の人は他に依賴せず、只だ自己を恃み自己の爲めに活動す。

日常生活に於て他の同情を受けんとするは是れ依賴心內に存すればなり。而して危險に瀕する場合に平生親交と信じたる人も一朝事あるに際し冷淡なるは社會的生活上より已むを得ざるの現象にして全く不幸を救ふ餘力なければなり。更に或意味に於ては人をして獨立自營の精神を發揮せしむべき天の默示なりと見て可なり。

人情の輕薄なるを嘆々するなかれ。是れ畢竟自己の獨立心甚だ薄弱なるを反證するなり。他の輕薄なると將た親切なるとは自己に於て獨立自營の精神堅きこと鐵の如くならば何ぞ他の自己に對して冷淡なるを憂へんや。

時間の利用

チエスターフィルドも曰く時間の利用を知らざるものは愚者の頂上にして賢愚の分岐點は唯時間の利用の如何に存するのみと。いかなる不平憂鬱にも打勝ちて健全に心を快活ならしめよ。自己の天與を發揮せよ。何れの企畫なく活動なく發展なく過去を失望し將來を杞憂し精力を空しく費す如きは明快なる頭腦も浮雲に捨てられ自身の處する處を知らず昏亂に陷り陰暗朦々として咫尺を辨せざるに至るべし。

時間の利用につきて一定の規律なく秩序なくんば妄想空想に耽り將來の悵望なく現在の趣味なく過去に對する精確なる回想なきに至る。

時間の尊重觀念なくんば新なる事業を計畫すべき勇氣なく快樂なく蕭條たる沙漠に置かるゝ感を抱き元氣なし。

獨立して事業の經營に當り絕大の苦心を用ひて幾多の事情の下に立つも巧みに時間を利用する人は殆んど時間の進行を覺へざるものなり。而して物我無二に時間を利用せば自ら快活なり。

苦をさけ樂を求むるは人情なれど自己の業務に誠實忠直熱心に奮鬪して萬事を處決せんには快々として業務に趣味を感じ一意專念業に當らば物我無二なり。いかに快ひぞや。

人安逸にして爲すなきを快樂幸福と想像するは非なり。彼等は歡樂に飽き無聊に荒み奢侈に飽き物に興味なく活くるに忍びざるに至り逸樂に慣れ快樂の精神を支持する能はず。活動英氣なく天下に心を滿足せしむるものなきに至る。

愚者と怠惰漢とは精神昏亂し秩序なく統一を缺き頭腦陰鬱なり。

全力を集注せよ

人一事に全力を傾注し即ち三昧に成りて他を顧みざる時は自己が心中に發生すべき幾多の憂慮不平を絶滅して一種獨特の天地を開拓しうるに至り無限の快感を覺ゆ。之に反し心を用ゆる法を知らず徒らに自己の職業を賤しみいやに思ふ如きは全力を傾注せられざる故なり。

習慣の力

無意識に活動し得らるゝ單純明快なる頭腦を作んとすれば根本的に正確に日常の習慣を作るべし。日常の習慣が人の頭腦に大なる關係を及ぼす。吾人日常の行爲無意識に行ひつゝあるものなし。

自己の意思を使用せずして自働的無意識的に巧妙有用の文章を記草し得るは心的習慣の作用に出たる結果なり。經驗を重ねずして熟練する能はず。

無意識的自働的に自己の才能を使用し得べき方法は實習の一事を除きて他に期待すべからず。

無意識本能に因て統一せられたる習慣力は其勢力强く靈的表示の最も强大なるものは此無意識的結果より生ずるものなり。是れ皆習慣によりて到達しうべきは實驗家の經驗する處なり。

能文の人は神來の筆と云ふなれども其實は習慣の力なり。意思の一部の使用は追想する方法に限るものなり。自己が往來なしたる所を參考的推理に依て事を斷ずるにあるのみ。此自働的行爲を巧妙に利用せんには自己の腦力を多く用ひず健全ならしめ自己の智能を開拓しうるに至らん。

病的意志即ち薄弱の人も意思の使行如何に依て困難の事も容易に完成し得るに至らん。すべて習慣の力よりして起るのみ。無意識にて自己の職責を盡しうるの理由は此原則を適用したる結果のみ。

一旦習慣の力によりて自己の腦力を多く使用せずして日常の行爲を十分に完成しうるに至るべし。

明快なる頭腦を持て實務に應用有力の効果を見んと欲せば常に修養して秩序ある習慣を涵養し之に因て日常の業務を統治する所あらば手足と頭腦を勞する事なくして爲す所極めて多からん。

怠惰因循なる勿れ

薄弱の徒は頭腦明快なるも事に對して怠惰遲滯の結果日々昏亂に陷り陰欝と化し終には自己の力にて如何ともすべからざる程の域に至るは必然の結果なり。

怠惰因循の人は其の爲す所すべて不快斷偸安に流れて一見平易の事に對してすら一刀兩斷の所置を取ること能はず。

自己の職能に精勵し大決心大勇氣を以て萬事を左右すべき强健勇敢の精神あらば一時昏亂因循なるも之を矯正しついに明快健全の頭腦となる。

我が頭腦は天性不健全不明晰なれば致し方なし。人力を以て矯正する能はずなどゝ無能の言を發する勿れ。こは眞に意志薄弱精神怠惰の人たるべき特徴にして併せて自己の無氣力を表す。

怠惰偸安を事とする人はこれを唯一の苦痛逃遁法とすべきも何ぞ知らん自ら苦痛を倍して精神を不快に導きて何らの法なく此苦痛は他の形を變じて煩悶と化し憂欝と變ず。蓋し時間を利用して自己の天分を盡さず己れの責任を無視するものは此處罰を被るべきは當然なり。

自己の腦を明快に導く一大活法は自己の決心にあり。自己の努力にあり。天然の不健全を悲むは是れ愚痴のみ。

人格の因と緣

生を享る者秘密に伏在する使命を自ら知らず、こは未知界に屬し自ら那邊に到着するかを知らず。天は人に成功すべき資質を賦與して必ずしも成功せしめず。成否は第二の造物自己にあり。

自己にいかに潜勢力を伏在するかを透視する能はざれども將來果して何れに成りうるやは此潜勢の分量と資緣の如何による。

原質には無限の精力ありて緣力の如何によりて發達す。

原因の潜勢力は其緣力の如何によりて發達す。マンモスと稱する暗黑の谿に棲息する生物は物像を視るの必要存せず。故に其視覺は鈍し。之に反して嗅と觸及び聽覺は非常に發達せり。自然はあらゆる生物を因緣的に發達せしむ。

森林の鸚鵡は緣色、色は緣に隨て變化す。原因は無定性にして緣に隨つて變ず因力無限なり。人何ぞ發憤激勵し大成功をなさゞらん。

天の我に賦與せる材幹鈍なりとて自ら安ずるは其因無限と知らざるなり。

野のバラ花瓣少く不美なるも豐沃地へ移して培養に力むる時紅黃色の花輪美となる

家庭教育の研究者の說に英國及大陸の癲狂院に收容せられたる大部分は小兒にして何も幼時より意志の訓練を缺たる者に係り家庭の教養宜しきを得たる者は此疾に罹る者稀なりと。

人の性癖及び習慣は猶希臘語及羅甸語を敎授する如く訓練し得べきなり。ジョシソン曰く、人は意志の如何によりて快活にも亦た陰鬱にも仆しうべし、忍耐と滿足の觀念は人を快活の方面に導き不平不滿の感情は人をして陰鬱ならしむ、小難を大難と過大視し大恩を過小視する傾向あり、又曰く如何なる事件に際しても常に光明の方面を觀察するは一年數萬金を得るに勝れりと。

煩悶する勿れ

目的なく理由なく空想に驅られて悲觀を事とする煩悶は單純一個の悲むべき事項あり て然かるにあらず、言に盡されざる各種の不安恐怖の事相寄り且つ繫續する爲に發生する心の病的作用なり、寂寞無聊の念坐に起り快々として孤獨の苦痛に耐へず、喟影の日光を覆ふが如く幸福が殺され悲觀呻吟煩悶する如きは寸益なく只害あり。眼前に至難事業到來せば是れ煩悶すべきにあらず、努力して自家の力量發揮の機會なりと覺悟せよ。奮鬪一番意氣颯爽を感ず。

光明を逆境の中に求めよ。現代の幸運兒も其半面には陰暗苦痛の閱歷を有す。自ら過古の境遇を回顧せよ。自ら自分の事にも肝膽を寒うする危險迫害悲痛に耐へざる事件も已に經過し來りしにあらずや、之に屈することなく勇進の結果今日に到れり。過古已に然り現在將來當に此の如くに奮進すべし、蓋し困難を以て磨練し始めて極樂に達せん、人はいかなる境遇にも濫りに精力を徒消せず總ての迫害と誘惑とに打ち勝つべきのみ。

義務と愛

義務は人の品性を形成するの神髓即ち正義を實行するの意なり、人生の義務は負債の如し、課程を果す如く能く義務を盡すは道德上の要求を遂ぐる所以なり。

父とし子とし君とし臣として國家の一員としての義務あり。

義務の眞意は神聖の見地より盡すこと即ち義務と愛と加算するものなり。米國一婦人船の沈沒せんとするを聞き躍然身を挺して救助せり、是れ遭難者を憐み暖なる同情の念勃然として身の安危を顧みず、是れ義務の眞意なり、義務は天の賦與せる深切と愛によりて遂げ易からしむ。

看護婦は其義務として忠實に病兒の床側に侍するをうべし、然るに其母病兒の生死如何を慮りてねるに堪へざるが如し、こは決して義務にあらずして愛なり。

愛を人生の一大義務とす、若し負擔を以て義務とせば苦痛を感ず、愛を以てせば百花薰せる春の野道に逍遙する如し。

敬虔誠實の生涯を欲せば溫厚篤實悠々として迫らず自然の性情より流露する愛の爲めに働かん事を期すべし。第一は眞理を愛するにあり。誠實正直の光明常に心頭に輝き虛僞を嫌ひ法性の發達を念とせよ。

人道を重んじ博愛を施さんとするは自我の物慾に打ち勝つ證なり。嫉妬怠惰奸邪不仁誤解は人世の幸福を殺ぐ。惡德は愛なきより生ず。

愛は人生を平安愉快ならしむ、博愛は高尙純潔なる、意思を表示す。人格高く同情豐かなるもの、博愛は生活途上の險坂を平にす。愛は四顧荒涼を極むる生存競爭の

野に紅の薔薇燃えて軟風の舒ろに清香を送るに似たり。

簡易主義と元氣の獲得

理想高く人格高く國政大任の人其態度從容として迫らざるは其責任の重大を思ふ故に心頭に邪念を容るゝ餘地なし。

偉人發明者の生活は極めて質朴單純遜謙なり。簡易主義は礦鐵の針の北を指す如く唯だ其理想に向て勇進す。

生活を單純にし從來の習慣嗜好を犧牲にせよ。其食物其言語を眞實高潔にし簡明にせよ。德性を養ひ不德の性慾を控除せよ。

偉大なる功果の秘密は唯だ簡易主義を實行するにあり。

克己心の厚き人にして簡易主義を行ふ。

簡易主義は心靈上に向上を欲し物質上に無慾なり。世の滔々たるもの心靈に盲目にして徒に肉に對する物欲を追求するに汲々たり。

其心事を純潔ならしめ其性格を堅固ならしめ奮然向上猛進せよ。空しく過去を悔ひ悲み不安なる勿れ。前途の光明日々新しき生命に向て旭日の天に昇る如くせよ。敢て以て過去の悔恨よりも過去の實歴に顧みて多大の智識を收め將來の行路を開く希望の光明より明日は今日より賢明なるを得べし。古來志を抱く士幾多の失に遇ひ一難を經る毎とに勇氣百倍し最後の勝利を得たり。

失敗を活用す。第一の機會に失敗し第二の機會は自ら戒飭し、終りには驚くべき經驗力に訴へて曾て失ひたる處を補ふ。

過去の榮華を說くなかれ。目的は將來にあり。賢不肖の岐るゝ所以は現在の實力を發揮して功を他年に奏せんとする是れ健全なる男子なり。

人の成功の秘決は充分に其精力を發揮し勇往邁進するにあり、實行を力とす。

過去の經驗を葬らず新智識新材料を活用し自ら聞く處を以て智識に化するを義務となす。

果敢活潑一日一日を有益にす。

外觀して見るべし。浮雲の榮華を誇る無智の心事を問へば寧ろ憐むべきもの多し人の心に山中の賊よりも大なる弱點あり。

人は生を天に享く天壽を全ふするの間は營々たり。智者は限りある生命をいかにして最善に到る目的の爲めに利用せんかを研究す。人生天賦なる義務あう。精力の及ぶかぎり遂行する覺悟を要す。人この問題を解決せんとするに際して危懼し恐怖し逡巡することあらば天命を解せず。

こぼるゝ光

恩師聖人のみあと尋ねて

好　月

恩師聖人の御あと慕はしさに、世にあり給ひし時の御事共承はりたく、かねて御縁深しときく鈴木由美子刀自を東京深川區菊川橋のほとりに訪れた。こゝは上人御年三十歳前後の御頃、五香の善光寺御建立に御苦心の際陰に陽に御たすけなされた家である。七十あまりと見ゆる刀自は元氣よく喜び迎へられて、三十年前の思出に、語るも聞くも時のたつのを覺えぬのであつた。

聖人がふとした緣を辿つて東京で最初に錫を留められたのが當家で、頃は明治廿一年の春二月初、一夜の御宿りの筈だつたのが、如何なる大ミオヤの思召あつてか、ふとした事から重き病の床に臥され、實に生死の街をさまよひつゝも當家の厚き看病によつて全快され、その後八月までこゝで過されたのであつた。

そも〳〵聖人が府内へおいでになつたは單へに師の遺志を繼いで下總國習志野に善光寺建立の志を果さんがためであつた。當時の御かきものによつてその御苦心の樣があり〳〵と偲ばれるのである。扇面に和歌あり

「老師世にいませし時弘法のため新たに聞きし村里に布敎道場をたてむと心をわづらはしたるに、いまだ其事を果さずしてみまかりし故弟子其惠海を報せむため身をこれに從事しぬる」と題し

法の師のめぐみの海に捨小舟
身をあら波によしくだくとも

他の一面には

「下總なる習志野はらはむかし牧野なりしをいまは土地を開きて民草のすめる里ともなりしにいまだ法の道は布かざりし故、法の道をも弘めまほしく思ひて

習志野のしげき草葉をふみわけて
御法の道のひらかまほしに

この習志野は牧野であつたのを維新の際諸方の窮民を移住させて開墾させられし所

で其當時はすでに百餘戸にもなつて敎法倫道を聽受すべき道場、祖先亡靈を祭るべき精舍が必要になつて來た。聖人の師靜譽上人これをあはれんで今の善光寺のところに常說敎所を設けておかれ、どうかして一寺建立せんと願出でられたが維持の費用なき爲許されなかつた。里人も亦維持費の負擔を思つて寺を建つる事をいとつたといふ。

里人のたのまぬ友にならばやと
山家はこえて身をうつしけり

上人はつねにこの常說敎所に起居して居られた、師の遷化せられた後はこゝに籠つて一百日の念佛三昧を修せられた。里人心やうやく動き、上人に一寺建立の事を願ふに至つた。今鈴木家にその當時の寄附帳が殘つてゐる。みれば聖人の序文と、行誡上人の附言がついてゐる。因に行誡上人の文を掲ぐれば

小金郷寄留ノ僧沙彌辨榮本年二十八歳、欽愼篤行先年已來藥本ノ大藏經ニ就テ閱藏功ヲ畢ル凡七千餘卷ナリ。當世未曾有ノ勝業ト謂ツベシ。平素有爲ノ福德ヲ求メズ專ラ無漏ノ定慧ヲ希望スト云。是沙門ノ實行ナリ。幸ニシテ發心ヲ培養セヨ聞ク所ニヨレバ昨今習志野ノ信徒田中佐治兵衞其ノ居宅及ビ宅地ヲ施與シテ一草庵トシ沙彌ヲ請シテ不斷念佛セシム。村民之ニ感ジテ兼テ此ヲ一寺院トセンコトヲ願スレドモ其資本ナキヲ以テ其志ヲ得ズ此ニ於テ沙彌ヲ勸進主トシテ四方有信ノ施家ヲウナガサントスト云。夫道場ハ三寶住持ノ依處ナリ願クハ貴賤男女ヲ擇バズ錢穀ノ多少ヲ論ゼズ此ヲススメテ福德ノ因、解脫ノ種ヲウエシムベシ。汝沙彌モ亦無所得ノ心ニ住シテ起立塔像ノ勝因緣ヲ結ブベシ。言ヲ十方ノ檀越ニ寄ス、沙彌辨榮ガ志ヲ感ズルコトアラバ幸ニ此ガ所願ヲ充タシムベシ。

明治十九年二月　　三緣山七十八世大敎正　行誡シルス

當時の事とはいへ、其帳には三錢、五錢等の喜捨領收の事が記載してある。かゝる微細な財を集つめるに如何に苦心されたかは思ひ半に過ぐるものがある。かの地方では多く立木をもつて寄附したので資金なくばそれを切る事も運ぶ事も出來ぬのであつた。そこで越えて二十一年ひろく淨財をつのる爲初めて東京にこられたわけである。その當時當家の老母のはからひで毎夜處々の大師講におつれしてはお話しをして戴

き、又米粒や胡麻粒に名號をかいたり、守本尊を燈明のあかりで書いて與へたりして少しづゝの淨財を集められたといふ。後には信實講とて善光寺の講社をつくつて、書畫など所望に應じて書き與へられ、夜を日についでの御苦心は言語の及ぶ所でなく實に食ふに米なくばそば粉、麥、いもをもつて代られ茶碗は缺け膳は三寶の緣のとれたものを用ひて居られ衣とて白衣は薄墨色となり法衣は剝げて日のあたる所は白くなつてゐるものを用ひて居られたといふ事である。

いよ〳〵本堂の出來上つたのは明治二十四年で實に五年の年月を經たのであつた。

御日常は至つて無口で朝から机にむかつて少しの時間も無駄にせられず、紙切と名のつく物には何か書かずにはおかれなかつた。病後はいたいたしいまでにおやつれになつてゐらした。或日の事、法衣をつけて自分の姿をしきりに寫して居られた如何遊ばすかと思つてゐたらそれがかの出山の釋迦の御圖の下繪であつた。當家にはその時の寫眞が殘つてゐる裏に「經卷 書寫」と題して

法のため露のいのちをこのまゝに、かけて示さむ水くきのあと

この頃はひたすら書寫をなすつて暫しも手をやすめられず、虫眼鏡で見ねばわからぬ位緻密な文字や繪を書かれる事も多かつた由で、米粒の片面に六歌仙の肖像と歌各一首をかゝれたものや、心經を書かれたものなどをみては實に神のなしわざと驚く外はない。國寶ともなるべき涅槃の圖は高さ二間幅一間半もあると思はるゝ大幅で全圖大涅槃經をもつて書かれたものである御顏の輪廓御眉の線はいふに及ばず御髮の毛一本一本までも悉く經の字でかゝれてゐるこの御圖をみては、如何に信仰のない人でも驚かずにはおられぬ。

聖人が如何に情の細やかで在したかは師の恩をむくひんために身を碎かれた事によつて知らるゝ事である。鈴木老母を親ともしたひその恩を感謝して居られたとの事で御病氣の後、八月に入つて五香に歸らるゝ時、同行が十三人ばかりでお送りして、一夜泊つて歸られたその後に賜つたお手紙をみてもわかる事である。

鈴木氏兩御老母並に皆樣に申上げ候

法のため身は浮雲にめぐりつゝ、結ぶえにしはもろ人に、ともに一佛淨土なる、

法のちぎりのためなると、始めて都に九重の、花のそのにと菊川の、里に入りにし頃ほひは、かほるあやめも珍らしく、かきつの花もさかりなる、百のはな〳〵いまよりも、さかりとならん時なるに、日々にくもりし露の空、我身は病の床にふし、重き枕もたびの空、たのみなき身のあはれさよ、さはさりながら此時に、いかなるえにしの契りかは、知らねど君が御惠み、あはれみたまひて朝夕に、いたはりまほりたまはられ、あつきめぐみに病をも、やうやく身體こゝろよく、もとの如くに復せしは、全くおかげと身にしみて、つら〳〵思へば前の世に、いかなる親子か兄弟か、淺からざりし緣ならん、昨日今日とも思ひしに、二月あまりもはや經てや、秋にも入りし菊川の、花もこひしく諸人は、歸るはわびしき習志野の、しげき草むら露のなか、けむりにたてる塵ほこり、久しき法の旅の空、道も忘るゝふるさとの、尋ねて入しは草の庵、露もるばかりのわびしきに、一夜は都の人々と、佛のまへに法の聲、また聞まほしに夜もふけて　明にしその日はあはれにも、我身ひとりを野の奥に、捨てて歸りし都人、いま一夜の名殘をと、留めど力におよばねば、ゆきにしあとをこひしくも、思ふ計りか日もくれて、誰れ訪ふ人もなき野かは、松風の聲をきくのみぞ、草葉になけるきりぎりす、心をなやます虫の聲、かなしきになく空蟬も、あはれに聞ゆるひぐらしの、虫の鳴く聲きくにつけ、我身も無常の秋風は、人の心をいためぬる、しげき草木もからすかと、おもへばうかうか居られぬと、涙を包むすみぞめの、袖をかゝげてみ佛の、御前にひざまづきながら、一心不亂に稱念し、後世菩提はもろともに、同じ心をおこしつゝ、安樂國に往生せんと、南無阿彌陀佛

菊川をいづるとき

花あやめまためづらしき頃よりも
いまはなごりの菊川のさと

すみぞめの袖のぬるるは露ならで
都をおもふなみだなりけり

二月のはじめ弘法のためと出でて、今かへりしは八月なり

白雪をふみわけいでしならし野に
　かへりていまは秋風ぞ吹く

昨日は久し振りにて師匠のはかにもうでて、松の林のなかに夕くれかた花を折り香をたき、何となう五年前の事を思ひ出してあはれげにおもひ、今は苔の下にて如何なりしかと、昔存生の面影目にみえて自づと涙も袖にしみ、

苔の下いかにわびしきものならん
　おもへばなみだとどめがたきに

とどめてしその面影に問けれど
　答ふるものは松風の音

何といふ美しい優しい御心であろうか、鈴木老母はこの手紙をみては泣かれたといふ。聖人、此世の名譽や階級などはもとより意にも留められなかつた或時、芝の宗務から教師補の資格を受けよといつて來た時一首の和歌をもつてこれに答へられた。

われはこれ佛弟子なれば許せかし
　世渡るしほをいとふ身なれば

又、善光寺が出來て法要をいとなまれる時、色衣を用ひねばならぬと、「この衣」をうけよと人にすゝめられて

色やまた香には染めじと我袖は
　ただすみぞめのひとへころもぞ

當時の御活動もまた寸分の隙なきものであつた。

御地より歸りてし十三、十四、十五の三日のあひだは村内一たびまはり、また經を讀みなどするより十六日には小金なる本山にて施餓鬼相つとめ十七日流山十八日は自坊のせがき、本年は都合により二十八日まで延ひ申し候。十八、十九日平方新田にて久しく御無沙汰により不足申され候よしをきゝ　彼處に參り、十九日岡田家外より蒸氣にて松戸まで降り法會相修し候。廿日鷲野谷醫王寺施餓鬼相つとめ、此頃より有志の輩種々集り、共に法益を乞ふ本來この鷲の谷てふ所は日蓮宗あり、眞言宗あり、淨土宗あり、又やそ宗あり淘宮といふ一流のものあり。皆共に農事のあひ

だには相集りて道を學ぶ、故にたとへ說敎するにも因緣話などは好まず、日蓮宗の信者は法華の講義を望み、眞言宗徒は其宗道々たづね淘宮の學者は又其學流をたづね、各、自分の信ずる處をすぐれて他の道はおとると思へり、依て小子が此里に來れば皆競ひ來りてその道をたづねらる、予は各その問を答ふ。いづれも道に志して尋ね來るものは年二十歳より三四十歳までの男子のみ、廿日の夜は法華經を講じて十二時過に及ぶ聽衆は二十人ばかり、眞言や其他の人もみなきく。

二十一日は晝十時頃より始め或は釋迦の傳諸宗の傳來等をたづねて夜十二時頃にいたる、此夜は三十名ばかり何れも皆男のみ、二十二日には同村眞言宗の寺に法會あり眞言の僧四名計り來れり。此處に小子を招きて眞言のおこり、傳來をたづねらる。眞言の僧をかたはらにおきて悉く眞言の宗道と傳來をとく、十二時過に至り二十三日には醫師染谷氏の請によりてまた一日法談二十日より一日片時も法談に暇なく此村里の人は元より軍談其他の書物には志しのものありといへども法門上にかくの如く志のある人の多きは小子も不思議に思はれ候、皆したうて若き男子の尋ね來るは感心いたし候まま、小子法談のおはりに臨みて皆々に向つていへり「我廣く諸方を遊化するといへども只說敎の坐に列なるものは多しといへども、ひそかに尋ね來て此法は如何此道は如何とかくの如く道をたづねて志すもの多きはいかにも感伏し候小子が身にとつていかばかりかよろこばしく存じ候」、と申しければ皆いはく「全く貴僧のごとくあればこそあひ難き法にあひ聞がたき道をきく事村内みなみなの幸ひこの上なし」といはれたり、又村里の人いはくこの村里に貴僧いづればこそ鷲野谷の名、ますます遠近にひゞく。ひとへにこれ村内人民の共に光をうける事よろこばしく候」

鷲野谷にて日々人々尋ね來て法話等にいとまなく申上候事もあまりにおくれて、心には存じ候へどもやむを得ず小金にて學士のために講釋をすること も未だ出來す、今日は少しく風邪の氣味にて熱もはつし休み居り候ままそのいとまにてかき侍ることも只勝手の事のみ、歸りにしその日より日々せはしなく、歌などよみはべることもあたはず只此鷲の谷のことに來てみなよく法門に志しのある人の多く出

來たのが小子の悦びにて候、小子がたはむれに書きちらしたるものまでも皆あらそひて珍重いたし候

我父母にも久しぶりにて相見へしにそれがし事今年もまた初日來三十あまりの日病にふし、すでに此世のいとまもやと思はるゝほどなれども厚き御看病のためにとく快くなりし全くおかげなりとこまやかに語りしに共にかたじけなさに感じなみだにもむせぶほどに相みえ候

以上は病後初めて故郷に歸り久々父母上に出あはれた時の便りである。昔から聖人は故郷にいれられぬといつて居るが上人のみはかくも尊敬をうけて居られたのである。かくて聖人は年來の宿望もはたし、教を布かれる事もいよ〳〵ひろくなつて來た、印度の佛蹟參拜を御思ひ立ちになつたも此頃であつたか、しきりに名號、佛畫をおしたためになり、つみ重ねて三寸にも達する程であつた。歸つてこないかもしれぬからとの御心が伺はれる。その時は淺草誓願寺の山内德壽院に渡天事務所をおかれ明治二十七年いよ〳〵御出立の前には五重相傳を修されたそうである。（以下次號）

思ひ出

夏山

どんよりと鉛色に曇つた北陸の空は、さらでたに憂愁の思ひを胸に抱く私にとりては耐え難い惱ましさであつた、汽車の走る沿道秋も既に老ひて僅に散り殘る紅葉に近く秋の名殘を止めて居る。昨夜「上人病重し」との谷さんよりの飛電に接し、そは一大事とばかり旅の身となつた私の心には刻々と近づく柏崎の空に憧れ乍らも、そこにはやがて展開する運命の恐ろしさが豫感せられて胸が戰くのを禁じ得なかつた。

夕暮近く驛に着いた．重苦しい思ひを人車に乘せ乍ら御寺へ着した時は何とも名狀し難い氣持ちであつた。

幾日の看護と心配に疲れた谷さんに逢ふた二人は手を取り合つた涙は止度なく頰を流るゝ、聞けば上人様は昨夜來御惱みとの事、御目にかゝる事が恐ろし〳〵もあり、なつかしくもある、度胸を定めて御寺の方々へ挨拶し上人の御居間に導かれた。

上人様は奥まつた御寺の庭に面した八畳の一間に靜かに臥床せられ御枕邊には孝生の大谷さんが淋しく看護申して居られた、上人様は御目覺めの樣子で非常に御喜び下された、そうして自分の御病苦も忘れて遠來の勞をねぎらつて下された、おゝ其の御息のさまよ、精神は至て明確におはしたけれども御舌は痛く乾いて御息の逼れる樣拜するからに心臟に非常に御弱りがあらせらるゝことを直感した。私の頭は電光の如く其の頃流行中のインフルエンザ性肺炎を思ひ起した、さうして非常に恐悸に襲はれた、漸やく度胸を定めて稱名の裡に御診察申上た、心力が弱つて御呼吸數の增加せる外に是れと云ふ他覺的の症狀が見當らぬ私は非常な注意を以て御胸部を聽診申上げた唯一つ右肺の後胸部に確かに捻髮音を聽き得た私はインフルエンザ性肺炎の疑を益々深くした。

主治醫龍島さんにも色々と是迄の經過を承りなどした、上人樣は當寺の御別時中に御發病になつたそうであつた御熱が餘り高いので佐々木上人達が强いて御進め申して漸やく御靜養になり其の後は一時御小康の體であつたそうである、愈々結願の日に結衆一同は御暇を乞い方々上人樣の御病氣御見舞に御居間に通られた際上人樣はわざ〳〵御床に起きあがられ力ある御聲で御挨拶の御言葉さへあつたとの事である　其後御病は益々重らせ給ふたとの事私は是れだなあと思つた、其の夜取敢ず持ち合せの强心藥を御注射申しあげた、結果は非常に良好であつた、上人樣は氣分が良くなつたと仰せられ外目にも餘程御呼吸が樂の樣であつた、私は大谷さんに代つて御介抱申上げた、上人樣は夜中にも中々御寢みになられぬ御模樣であるさうして、時々呻吟樣の深呼吸をなされる樣御胸苦の程もさこそと忍ばれて御痛はしい、それに上人樣は一今夜は昨夜より非常に氣分が宜しい」と仰せれた處を見ると昨夜の御苦惱はどんなであつたであらうと御推察申しては胸絞らるゝ思ひをした。

うつら〳〵とする中夜は明けたさても北國の陰鬱さよ野も山もひたふるに重苦しい雲に包まれて終日雨が降る、私は何だか悲しみの國に旅立た物語の主人公の樣な氣がしたさうして一層御上人樣を御痛はしいと思つた。

此日の御上人樣は御熱も少し下り御氣分も幾分宜敷い樣に拜した私はほつと安心の胸

を撫で下した御眼覺めを待ちて拜診した時には昨夜確かに聽いた捻髮音が消失して跡方も無い私ははつと思つた、そうして悲喜兩樣の觀を抱いて御經過を待た午後は御熱も高まりそれに御胃部に御苦悶かあらせられる體で絶へず嘔氣と嘔吐に惱み給ひ御食事とても進ませられない强いて御進め申した牛乳さへ直きに嘔吐遊された、私は非常の罪を犯した思ひをして後悔した午後越後から若菜さんも見へた有らゆる手段は講せられたが効果も現れない相變らず尿には多量の蛋白は漏らし玉ひ顏面は潮紅して御舌は痛く乾きさうして嘔氣胃部苦悶かあつて餘り水分さへ召し上られぬ樣である若菜さん籠島さんが尿毒症と御診斷申上げたのも尤の事であつた御熱の高い折などは御睡眠中には譫語さへある程である、或る日の午前であつた私は一人御看護申上げて居た時御譫語の樣を耳を寄せて承はつた事があつた御舌がもつれて分明しない處もあるか皆御說法の御言葉であることがわかつた其の中はつきり聽きされは中に、「如來は常にましますけれども……衆生には分らない……其れを知らせに來たのか……辨榮である」私は拜聽して限りなき尊さを感じた。

上人樣御病氣の事は追々と遠近の方々に知れ渡つて御見舞の方々て御寺はいつも一ばいであつた佐々木上人も御別時を濟まして歸られる大谷上人は九州から見へた笹本上人鈴木上人小黑さんなと知名の方々が集まられ吉岡上人原さん其他附近の方々は毎日汽車を利用して見舞はれた、そうして面やつれし玉ふて唯すやすやと御寢みになつて居らるゝ樣を拜してい御痛はしさに皆涙に咽はれた、心弱き婦人達ちなとは只すすり泣きせられては上人樣の御德を今更のよふに語り合はれた。

上人樣の御病狀は一進一退であつた御氣分の宜い折には看護の人々に御話し遊ばされた御言葉はもつれがちで聽き取れにくかつた「御上人樣さぞおつらいでしよう」或る方が御尋ね申しあげた「イヽエちつとも苦しい事はありませんよ私は何時も如來光明中に棲まして戴いて居ますからあの苦しそうに見えるのはあれは病魔かあなた方の同情を引ふと思つてすることですから決して欺まされてはなりません」と仰せられた。

實に御上人樣の全病間を通じて私の一番感動した事は安忍の御狀態であつた私は如何に修養の積んだ人でもこの樣な病氣の時には必ず心に秘められた弱點が現はれることを知つて居る、是れが御上人樣には少しも無かつた殊に御上人樣の心臟の御弱りの御樣子は脚氣衝心の場合と少しも異らないこんな病氣では如何なる人でも決して安靜に仰臥されるものでない。其れが御上人樣は私が初めて拜診してから御遷化迄仰臥なされて兩膝をキチンと御立てになつた儘微動もなされなかつた。私は安忍の力を事實の上に御見せ下さつた上人樣に心から感謝せられずには居られなかつた。

二十六日午後は御氣分も宜しく御食事も少量づゝ召し上られた此分ならばと一同少しく愁眉を開き一日も早く御全快を祈つた、も來の間夜間には再び警戒すべき事變が起つたそれは腸出血があつた事で此の時は極樂寺の奥さんも聲を擧げて絶望の思ひを漏らされだ私は頭から水かけられたやうな心地がした折柄來診中の籠島さんと二人して慌急の御手當て申しあげた、幸に其後は著しい御出血は起らず此の後胃部の御苦悶は却つて御緩解の樣子に拜せられた、此れは腸出血の爲自然其れが誘導と爲つて胃部の鬱血を緩解した爲であつた。其後一二日は大變御氣分も宜しく御食事もマルツ汁など喜んで召上られた阿片を少量用ゐた爲か御苦痛もやわらき却つて少し御興奮の御狀態でよく皆に御談話あそばされた。或る時は宗教哲學の瞑想に入つて居たと仰せられては傍に侍する私に一切智一切能に關する至妙の玄理を御說き下されたの惜しい事には御舌のもつれと且つは御安靜を妨げてはとの杞憂からわざと遠ざかるやうにして御止め申した事を今では殘念に思ふて居る。

三十日頃には危險の症狀が見えて來た御熱も高まり心臟も衰弱一方て一日二回位ひの注射を要する事となつた。私は結果を想像しては自分の理性を失ふ迄煩悶した唯此の上は如來へ御縋かりして御平癒を祈るより外無かつた本堂御佛前に馳せ參しては同じ思ひの各信者方と只もう一心に御平癒を祈願した、吉岡上人の御盡力で新潟から澤田博士が來診された三回の食鹽注射も効無く御病狀は御重らせの一方である、是れ迄御上人樣は無礙光佛が此處にましますと仰せられしは時々禮拜せらる或る時は歡喜に充ちた御樣子にて禮拜せらるゝこともあつた。そうして「私の萬事は如來樣に任せてある故成るべく不自然な治療はせないように」と仰せられ乍らも治療は一切醫師任せであらせられたが此の日より「如來樣が早く來いと仰せらるゝ故もう治療はせな

い様に」と仰せられ今はとりつく嶋も無き様となつて一同は唯絶望の思ひに忍び泣くのみであつた。午後水蛭を心部に貼し奉つた直後は不思議な程御言葉もハツキリとした唯此の時御上人様は仰臥のまゝ空を見つめて丁重に禮拜せられ「願はくば此の功德を以て普く一切に施こし」とそれは〳〵實に力ある明瞭な全く別人の様な御聲でしかも三度迄御廻向なされた。其の時は唯感激して拜したのみであつたが今思へば之れは一生の總廻向では無かつたか、思ひ出すだに崇嚴の感に打たるゝのである。其の後は是れで安心と思はぬばかりに唯昏々と御寢みの御様子であつた。

午後四時頃であつた私は隣室に退いて居ると上人様が御召しとの事に急いて御伺ひした。此の時私は御上人様が何を仰せになるかが直感したので私は申しあげた「上人様光明會の事は決して御心配遊ばさない様に不束乍ら私共皆々協力して誓つて御遺志を繼紹致しますからと」申しあげた此の時御上人様の御瞳は輝き御涙をさへ宿し玉いて御手を擧げて合掌し玉いつゝ「どうぞ頼むどうぞ〳〵」と仰せられた此の時の印象は終生我が胸に刻まれて忘れがた無い悲痛の曲である。そうして懈怠不信の我が現狀を顧れば……嗚呼私は何時迄泣いて懺悔せねばならぬ事であろふ。

夜は愈々御危篤に陷らせられた今は御脈も糸の如く頼み少なくなり玉ひ御意識も次第に失はせ玉ふかに拜せられたが御顏は紅を帶びて輝くばかりに美しく其の艶々とした御色に少し汗ばみ玉ふ様是れが御臨終の御姿とどふして拜せられようぞ。御傍に侍する多くの人々には諸行無常を感じ乍らも現實の生死を打ち越えてたゞ常恒に横はる靜寂があつた、不思議な事には其れが御傍を離るれば、やる瀨ない悲しみの黑暮が直ちに身を襲ふて來る。堪へられなくなつて御傍に參ずれば上人様の御顏せには微塵も死の影だに無く只大平和があつて此の上人様の氣分に包まるゝ時實に限り無き慰めが私等の胸に來た、唯御息が逼つて拜せらるゝのが御痛しいと思つた、然し此の時も上人様は時々御手を擧げさせられて御額のあたりに驚し玉ふ事が度々あつた、私は此の時御上人様平素御說法のとき「私等の前には實に尊き如來様がましまして」と仰せらるゝ時必ず御手を額のあたりに驚し玉ふが御僻てあつた事を想起した。上人様は御口は今は自由を失ひ玉へども私等に三昧現前の御境涯を示し玉ふのではないかと思はれたそうして御上人様御自身は今は既に三昧境中にましますは故外より拜する御有様とは全く反對に今は無爲三昧樂の御境涯に入らせ玉ふた標徵であると私は有り難い事に思つた。

十二月四日嗚呼我等が長へに忘れかたき日は來た其の崇嚴極まり無き落日の光景は到底私等凡筆の境涯では無い戸外は天愁ひ地悼みて滲風悲雨吹きすさび室内には涙に唱ふる稱名の聲禮讃の響き千秋忘れがた、斷腸の曲が奏せらるゝ中に上人様は光輝大千を照らし玉ひつゝかすかなる稱名の御聲諸共焉然として西天に歸らせ玉ふた御御息の止つた後も暫くは空の一方を見つめ玉ふこと暫時聽て靜かに御瞼を閉ぢ玉ふた嗚呼我等の世尊大慈父上人はかくして此の日を最後に此の世の法輪を長へに轉し玉ふた、淋しき山の端に立ちて今日を限りの入る日を送りし心地おゝ響くよ永遠に鐘の音が!!! 嗚呼。

夏山申す以上は只私個人として見奉つた僞りなき御上人様の御往生記の半面であります思ふに上人様の御最後迄御看護申し上げた方々はまた澤山御出になりますからその方々からもかうした者をミオヤの光り社へ送つて戴いて上人様の偉大なる御往生記を完成し度いもゝと存じます

故辨榮大德三周忌所感

吉岡性空

故辨榮上人ノ御化導ヲ蒙リシ信男信女十數名寄リ集ヒツヽ、三周忌追恩別時會ヲ執行シマシタ、此間御遺翰（七八通）ヲ拜讀シテ上人御在世ノ昔シヲ偲ヒツヽ一同悲喜ノ涙ニムセビ、特ニ左記ノ一節ガ今更ナガラ痛切ニ感ジマシタ。

『念佛弘通ノ宗祖ノ宗風ヲ世ニ宣傳スルニ、自分ニ念佛ノ爲メニ僅カノ口ヲ借スサヘモノウキ貌ニシテ、而モ大道ニ出テハ大キナ聲ヲ揚ゲテ諸人ニ念佛ヲ勸ムルハヲカシ、孔子曰ク己レノ欲セザル處ヲ人ニ施ス勿レト、自ラ餘リ好マシカラヌ念佛ヲ人々ニ强ユルハ如何ガト思ハル。云云』

上人ノ遊履シ給フ處、必ズヤ若干ノ念佛者ヲ殘サレタ、然ルニ吾等ハ常ニ傳道ニ聲ヲ

カラシヽ尙ホ一人ノ信者ヲ產ミ得ザルモノ、之レ偏ヘニ自己信念ノ至ラザルガ爲メデハナカロウカマタ……如何ニ信念深クトモ化他ノ善巧ガ克ク時ト處ト人トニ順應セネバ救濟ノ實ハ揚ゲ得ラレヌ、若シ此自覺モナク徒ラニ舊式ヲ固守センカ本願ノ大生命ハ、アハレ隱滅ノ外ハナカロウ、此點ニ於テモ、故上人ガ勤メテ淨土敎義ノ新解尺ト新シキ宣傳形式ヲ用ヒ給ヒシ貴キ御辛勞ヲ深ク〳〵感謝セネバナラヌ、今ヤ信仰界ノ益々混濁ヲ極メ宗義ノ愈〻亂麻ノ狀態ト變シ敎範ノ制定、法式ノ改造急ヲ告グルノトキ、誰カ上人ヲ痛惜セザルモノガアロウ、吾等ハ三周年ノ御正忌ニ當リテ上人追慕ノ情禁シ得ズ思ハズ左ノ叫ビヲ發シマシタ。

嗚呼蓮花臺上ノ上人本誓虛シカラズ速カニ穢國ニ還來シテ人天ヲ度センコトヲ……

南無阿彌陀佛　　巳上

故上人の三回忌に就て

観道

辨榮上人の世を去りましてより已に三年を過ぎた、歲立つ事の速さが今更らのやうに偲はれる、乍然私に於ける故上人は今も尙昔に變らぬ懷かしさである。

凡そ人といふ人の中に上人ほど私の光となり力となつた方はない、釋尊も孔子もクリストも固より私には上なき向上の大師である。乍然今日の如く腐敗せる現代の社會に於て上人ほど現實に宗敎體驗の人として私の日常を指導して下さつた方は無い。尤も私の信仰は上人にお目にかゝる以前に於て已に法然上人によつて如來の慈光に浴してゐた、又夫以前百山の老師によつて淨土念佛が凡夫本位であることも信じてはゐた、けれども私の斯の確心をして一層强く明かに而してこの私を現在より永遠に一層深く眞實の生活に立たしむるに至つた事は偏へに故上人の賜である。

殊に上人を芝の學寮にお迎へして以來七年の間、日夜寢食を共にさせていたゞき、或は滿鮮北越の天地に隨伴も許されて親く上人の溫容極まり無き其の靈格に接し得た事は忘れんとして忘るゝ事の出來ない私の喜びである、而も今日猶寸蔭をも惜みて日夜に働く決心の私の心に起り得るに至つた事は正しく故上人の百山老師と共に私に示

し玉ふた宏恩である。

一般の人の眼には上人逝きまして已に三年を過ぎたかも知れぬ、乍然其の實私の心には上人、今尙住して去り玉はず、靜かに其の尊容を拜し奉れば其の生前にも勝りて私の光となり又力となつて在しますのである。

乍然現には上人の此の世を去りましてより已に三年を過ぎた　而も此間私共の此世に爲した所果して幾何であらうか、思廻らせば之亦慚愧の極みである、願くば此際更らに一歩を進めては深く人生の行路を省み、親く如來の慈光に化せられては大慈宣傳の中心にも立ち度いものである、是正に私の今生に於ける生きがいであり又上人の宏恩の酬ゆる萬一でもあらう。(一九二二、一二、二六)。

南無阿彌陀佛

故上人の三回忌を迎へて

仙界

恩師上人淨土へ歸り玉ひてはや三年、嗚呼此間何を爲し得たかを思ふ時只寂ーき心と悲しき悔あるのみ誠に慚愧懺悔の至りである。

昨冬十二月四日追恩別時を修すべく筑前遠賀郡香月村專福寺に到る同寺住職は九州光明會の先達丹波圓淨師なり。時恰かも十夜法要中にて布敎師は故上人に因緣深厚の佐々木爲興上人である外に故上人最近の御弟子谷安三師が偶然二三日前同寺に來られ到着の翌日より病の爲め床に臥しられけるが四日の御正當には暫く床を離れて一同と共に念佛せらる私は九州の片隅で斯くもめづらしき道友が御忌辰に相會する事を不思議に思つた、十二月四日と云ふ日に私にとつては何だか妙な神祕の威を與へる　大正九年の其の日は上人に別れたのみならず產れ育つて而も住職となつて居たなつかしい

長安寺を捨てた日である而かもそれが道の爲めに自然の成り行きであつた、思へば大正九年の十二月四日は師なる父に別れ寺なる母に離れた日である、全く曠野に立ちたる一人ぼつちの感がした、いでやこれから自分は唯一のミオヤの下に全く新く生んだ事を念じた越へて大正十年の當日即ち御一周忌よりはおぼつかなくも向上の一路に足踏み立つる事が出來るかの如く思はれ出した、今や三回忌の辰を邀ふるに當り小倉市田町心光寺を董する事に決定した勿論それは傳道上の便宜を得る爲めであるが其等の事が御年忌の折に實現し來るのも故上人の護念如來の聖旨によるものゝ樣に感せずには居れぬされば只我は今後のすべてをミオヤの聖旨に打まかせて白道を突進せんとするものである。

大正十二年一月二十三日印刷納本同二十五日發行
毎月一回二十五日發行　誌代一冊貳拾錢　一ヶ年貳圓

編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地　秋場熊太郎
印刷所　東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地　秋場印刷所
發行所　東京市小石川區水道端二丁目四十四番地　ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番